

# 大学が主催する地域子育て支援拠点の 利用ニーズに関する研究

——神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」利用者への面接調査を手がかりに——

難波 愛 神戸学院大学心理学部 岡野 太郎 聖泉大学人間学部

道城 裕貴 神戸学院大学心理学部 清水 寛之 神戸学院大学心理学部

**The usage needs of community-based child-rearing support centers managed by universities:  
Based on the interview survey of users in the child-raising salon “Manabi”  
at Kobe Gakuin University**

**Ai Namba** (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

**Taro Okano** (*Faculty of Human Studies, Seisen University*)

**Yuki Dojo** (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

**Hiroyuki Shimizu** (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

本研究は、大学が主催する地域子育て事業のありかたを考えるための一助として、神戸学院大学心理学部が運営する子育てサロン「まなびー」を利用している保護者を対象に、個別面接調査を行い、「まなびー」に対する支援ニーズや利用目的などについて探索的に検討した。保護者 9 名（全員女性、うち 1 名は 70 代の祖母、それ以外は 20 代と 30 代の母親、子どもはいずれも乳幼児）を対象に、2023 年 5～7 月に、「まなびー」を開催している同室内にて 1 人あたり 30 分程度の半構造化面接調査を実施した。調査の結果、利用ニーズとして子どもが遊べる場所の確保、同じ年代の子どもを持つ保護者との交流、大学が提供する特別プログラムの利用などが挙げられた。保護者と子どもにとって、「まなびー」の利用が生活の刺激となり気持ちがリフレッシュされることが示された。今後、大学がどのような形で地域での子育て支援に貢献できるのかについて考察した。

**Key words:** community-based child-rearing support centers, university, child-raising salon, usage needs, interview survey

キーワード：地域子育て支援拠点、大学、子育てサロン、利用ニーズ、面接調査

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2024, Vol.7, No.1, pp.47-58

## 問題と目的

厚生労働省（2023）の「令和 5 年（2023）人口動態統計月報年計（概数）」によると、2022 年の出生数は 770,747 人であり、1899 年の統計開始以来最少の人数である。国立社会保障・人口問題研究所（2024）の「日本の将来推計人口（令和 6 年推計）」でも、新

型コロナウイルス感染拡大以前から見られた合計特殊出生率の低迷を反映し、将来の合計特殊出生率が低下することが指摘され、少子化の進行はこれまで以上に加速していると言える。

そのような現況の中、我が国においても 1994 年に文部省（現・文部科学省）、厚生省（現・厚生労働省）、労働省（現・厚生労働省）、建設省（現・国土

交通省)の4省が連名で発表した「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」(エンゼルプラン)を皮切りに、さまざまな取り組みが行われてきた。当初は厚生省(1993)の「厚生白書(平成5年版)」でも「保育者が地域住民に対して育児不安に関する相談・助言や地域の子育てサークルの育成支援を行う」と記載されているように、子育て支援を保育所等の施設が支えていくという流れのなか(日下・笠原, 2015), 待機児童問題や子ども虐待件数の増加等急変する現代社会の実情に対応することができないことが指摘されていた(柏女, 2020)。そこで、2012年に子ども・子育て支援法の制定及び児童福祉法改正で、2015年度より子ども・子育て支援制度が開始した。この制度は、(a)質の高い教育・保育の提供、(b)待機児童の解消、(c)地域での子育て支援の3つをポイントとし、地域と密着した子育て支援がよりいっそう充実することが期待されている(道城他, 2015)。

地域と密着した子育て支援の一つとして、2007年に地域子育て支援センター事業とつどいの広場事業を再編し創設された、地域子育て支援拠点事業が挙げられる。これは子育てをする保護者と子どもの交流などを促すことにより、子育ての不安感の緩和や子どもの健やかな育ちの促進を目的とする事業である。具体的には、保護者と子ども同士の交流の場の設置、子育て相談、地域の子育て情報の提供等を事業内容としている(中谷, 2014)。

神戸学院大学心理学部が位置する神戸市西区は、神戸市のなかでも就学前の幼児が比較的多い地域である<sup>1</sup>。心理学部(2018年4月に人文学部人間心理学科より改編)では、2011年から発達心理学に関する学生の実習の場として子育て支援プログラムを開始した。これを拡大・発展させ、2014年から神戸市と連携して地域子育て支援拠点神戸学院大学子育てサロン「まなびー」を開設している(道城他, 2015)。子育てサロン「まなびー」は、原則火、水、木曜日の3日間、10時～16時の時間に開室している(ただし、大学行事等を除く)。開室期間は、年間で約130日間である。2023年度における延べ利用者数は261組であった。

活動内容として、通常は心理学部棟3階にあるプレイルームを開放し、常駐の保育士2名が親子連れを見守る「見守り保育」を行っている。親子連れは来たい時に来室し、親子で玩具を用いて遊ぶなど自由に過ごして帰っていく(道城他, 2016)。その他に、学部学生による特別プログラム「がくせいとあそぼう」を月に1回水曜日の午後に実施している。これは、公認心理師養成の授業科目の一つに位置づけられている。学生は4、5人の班に分かれ、4回の授業時間を使って子どもを対象としたプログラムを立案・準備・実施する。1人の学生が子どもを前にプログラムを実施する機会は、前後期の授業内で各1回である。その他、授業期間外に、外部講師を招いて親子リトミック教室を開催したり簡単な調理実習を親子で行ったりする「特別プログラム」を年に数回実施している。いずれも通常プログラムに利用登録をしている親子が対象である(表1)。

これまでの神戸学院大学心理学部における子育て支援事業の実施経験を踏まえて、難波他(2022)は日本全国の子育て支援拠点の利用状況に関する大規模なWeb調査を実施した。その結果、就学前の子どもをもつ親にとって子育て支援拠点は、子どもを遊ばせる場として活用されていること、他の親子との交流ができることが主な利用目的であった。利用にあたって、当該施設へのアクセスがしやすいことが求められていた。また、生活状況におけるストレスと孤独感、家計について「大学の子育て支援拠点利用群」と「大学以外の子育て支援拠点利用群」ならびに「子育て支援拠点の非利用群」の3群で比較したところ、「大学の子育て支援拠点利用群」は、「子育て支援拠点の非利用群」と比べてストレスは有意に低い、孤独感は「子育て支援拠点の非利用群」よりも有意に高かった。しかしながら、大学施設のスタッフの関与や取り組みが大学以外の施設と質的に異なるものなのか、また、もし違いがあったとして、その点が利用者の孤独感の差異に繋がっているのかは明らかとなっていない。

こども家庭庁(2024a)の「令和5年度地域子育て支援拠点事業実施状況報告書」によると、全国の子育て支援拠点は8,016カ所にのぼるが、学校法人(大

表1  
神戸学院大学子育てサロン「まなびー」の枠組

| 開催日数                                     | 開催時間       | 子育て支援拠点の型                                  | スタッフの人数             | プログラム                                                                                                                    |
|------------------------------------------|------------|--------------------------------------------|---------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 毎週火曜・水曜・木曜<br>の3日間<br>ただし、大学の休業期<br>間は除く | 午前10時～午後4時 | 見守り型<br>*親子で過ごしてもら<br>う。子どもの預かり保<br>育はしない。 | 保育士2人が常駐<br>*4人の交代制 | ・月1回:3年次学生主体の<br>プログラム「がくせいとあ<br>そぼう」(授業として実<br>施)* <sup>1</sup><br>・年に数回:外部講師によ<br>る特別プログラム<br>例)リトミック、親子で料<br>理、キッズヨガ等 |

\*1 公認心理師資格取得に必要な授業「心理演習Ⅰ・Ⅱ」を選択した学生が対象

学・短期大学かどうかは不明)が運営する子育て支援拠点は320カ所(4.0%)に過ぎない。神戸学院大学が運営する地域子育て支援拠点事業の利用ニーズを明らかにすることは、大学・短期大学がその特徴を生かして、よりいっそう有用な子育て支援を提供することにつながると考えられる。

そこで本研究では、神戸学院大学心理学部が運営する子育てサロン「まなびー」を利用している保護者を対象に、子育てサロン「まなびー」に対する支援ニーズや利用目的について探索的に検討するとともに、大学が主催する地域子育て支援拠点全般に対しても、その役割やニーズについて広く検討することを目的とする。

難波他(2022)の調査においては、大学施設の利用者は少数であるものの、子育ての中で孤独を感じている親が利用する傾向にあること、地域とのつながりが高いことに満足感を得ていることを報告している。また、丸谷(2016)は、子育ての仲間が、子どもの成長を競う競争相手という側面もあり、仲間の中にいながら、劣等感や孤独感を募らせる場合もあることを指摘している。したがって、子育てサロン「まなびー」利用者が、育児への否定的な感情や孤独感を抱いているのかについても併せて検討することによって、子育てサロン「まなびー」の現状を把握することができ、かつ、より良い支援を見出す一助となると考える。

## 方 法

### 調査対象者

神戸学院大学心理学部が運営する子育てサロン「まなびー」(以下、「まなびー」とする)を利用している保護者に対して、来室時に本研究への協力を呼びかけ、調査対象者とした。母親8名と祖母1名がイ

ンタビューに応じた。

調査対象者のプロフィールを表2に示す。

### 調査手続き

調査期間は、2023年5月から7月であった。調査対象者に対して、本研究の趣旨や個人情報の取り扱い等について説明し、研究参加についての同意を文書で得た。

その後、1人あたり30分程度の半構造化面接を「まなびー」を開催している同室内にて、保護者と子ども同席で実施した。面接は、研究者1人と調査対象者1組の個別調査であった。

「まなびー」を実施する部屋で調査を行った理由は、改めて別室に移動することによる子どもと保護者へのストレスと時間的ロスを軽減するためである。なお、この調査の期間中、同室内での混雑はほとんど認められず、他利用者との物理的距離は十分に取ることができた。なお、インタビューの発言内容は、ICレコーダーに録音された。

### 利用機器

録音に用いたICレコーダーは、SONYステレオICレコーダー(ICD-PX470F)であった。

### 調査内容

調査内容は、(a)「まなびー」利用の動機(b)「まなびー」を利用して「良かった」と感じる点(c)利用前後における変化(保護者と子)(d)「まなびー」に希望する点の4つの質問項目であった。

### 分析方法

逐語録を作成した後、KJ法(川喜多, 1980)を用いて分析を行った。4つの質問項目ごとに、調査対象者の回答を文意に則してセンテンスに区切った後、

表2  
調査対象者の属性

| 調査対象者 | 性別 | 年代      | 職業       | 利用回数<br>(のべ) |
|-------|----|---------|----------|--------------|
| A     | 女  | 30代     | 会社員(育休中) | ～5回          |
| B     | 女  | 20代     | 主婦       | ～20回         |
| C     | 女  | 30代     | 音楽療法士    | 20回～         |
| D     | 女  | 30代     | 教員(育休中)  | ～5回          |
| E     | 女  | 40代     | 無職       | 20回～         |
| F     | 女  | 30代     | 会社員      | ～5回          |
| G     | 女  | 30代     | 会社員(育休中) | ～5回          |
| H     | 女  | 30代     | パート(育休中) | 20回～         |
| I     | 女  | 70代(祖母) | 無職       | ～20回         |

注) 利用回数は、0～5回を「～5回」、6～10回を「～10回」、11～20回を「～20回」、それ以上を「20回～」と表記した。きょうだい児の利用がある場合は、きょうだい児の利用を含めたのべ回数とした。



質問項目内で類似するセンテンスを集めて小カテゴリーを作成した。なお、ある質問項目における調査対象者の回答が、他の質問項目の回答としてふさわしいと研究者が判断した場合には、その質問の回答に移動させた。また、複数の質問項目に当てはまると判断された場合には、両方の質問項目に記載した。これらの作業は本研究の研究者全員の協議に基づき行った。その結果、当初用意した4つの質問項目は、①「まなびー」利用およびプログラム選択のきっかけ、②「まなびー」を利用して「良かった」と感じる点、③「まなびー」利用者前後における養育者の変化、④「まなびー」利用前後における子どもの変化、⑤子育てに対する気持ちの変化、⑥「まなびー」への希望や要望の6つの大カテゴリーに分類された。それぞれのセンテンスがどの調査対象者の発言か分かるよう、文末に調査対象者を示すアルファベットを記した。

### 倫理的配慮

本研究は、「神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員会」の承認を得て実施した（承認番号：HP22-7）。また、調査実施にあたっては、調査への参加は自由意志であり参加を断っても何ら不利益がないこと、回答は匿名化され、プライバシーが保護されること、結果は本研究調査以外に使用されないことを説明文書・同意文書に明記した。

### 結 果

表3は、大カテゴリー①「まなびー」利用およびプログラム選択のきっかけをまとめたものである。小カテゴリーとして、「まなびー」利用のきっかけ、「まなびー」利用の具体的な理由、特別プログラム利用の理由、利用のメリット、利用前の印象が抽出された。

「まなびー」を認知したきっかけとして、「ママ友」からの口コミ、近所で知っていた、子育て支援の一覧をもらったことに加えて、大学施設での開催に興味を持ったという回答が挙げられた。「まなびー」利用の具体的な理由として、遊ぶ場所を求めて、刺激や楽しさを求めて、近い・気楽、駐車場があること、全天候型であることの5つの小カテゴリーが抽出された。「特別プログラム利用の理由」として、本学教員のプログラムであることや、学生がプログラムを実施していること、などの回答が認められた。利用のメリットとして、わざわざ来ている人が多いことによる安心感、いろいろな子どもがいるのを知るため、おもちゃの取り合いなどの社会経験を求めて、などの回答がみられた。一方、利用にあたって、大学施設へのハードルの高さや、参加することへの躊躇があるという回答があった。

表4は、大カテゴリー②「まなびー」を利用して「良かった」と感じる点についてまとめたものである。7つの小カテゴリーが抽出され、7つの小カテゴリーがさらに「子どもにとって」、「保護者にとって」、「『まなびー』の環境に対して」の3つの中カテゴリーにまとめられた。「子どもにとって」では、わが子が他の子どもと関わることが刺激になるとの回答や、そもそも他の子どもと関わる場がないため、他の子どもと関わることが「良かった」との回答があった。また、学生との関わりが子どもの楽しみになる、保護者ではない年の近い学生に遊んでもらうことがよい、との意見があった。「保護者にとって」では、他の保護者との関わりを持ち、お喋りをするのが息抜きになる、子育ての話をできて助かるなどの回答があった。「スタッフとの関わり」では、専門機関に相談するほどではないが、「あまり食べない」や「この月齢でこれ（発達段階）でいいのか」など、子育てをしていて気になることを気軽に聞くことができ、聞くと安心したりスッパリしたりする、との回答があった。「『まなびー』の環境に対して」では、「『まなびー』の環境の良さ」として、ぬくもりのある木製の玩具が多いこと、手に取りやすいように並べてあること、のびのびと遊ばせてもらえることなどが挙げられた。「雰囲気の良い」として、「いいですよ」というおおらかな雰囲気や適当な規模であること、お友達が適度にいて、誰かと一緒に遊べるし一人遊びもできる、という遊びやすさが「良さ」として挙げられていた。

表5は、大カテゴリー③「まなびー」利用前後における養育者の変化についてまとめたものである。中カテゴリーとして、「保護者同士のコミュニケーション」と「保護者の気持ちが前向きに変化」の2つのカテゴリーが抽出された。「保護者同士のコミュニケーション」では、同年代の保護者同士で話す機会があまりないので、良い機会となっていることや、「まなびー」で出会う保護者とはコミュニケーションが取りやすい、などの回答があった。「保護者の気持ちが前向きに変化」では、喋ってスッパリする、子どもと行くところがあることで心にゆとりができる、家よりも大らかな気持ちで子どもを見守ることができる、といった回答があった。

表6は、大カテゴリー④「まなびー」利用前後における子どもの変化についてまとめたものである。中カテゴリーとして「子どもの楽しそうな姿」と「子どもの生活リズムが整う」の2つが抽出された。「子どもの楽しそうな姿」では、「まなびー」では子どもがとても楽しそうに過ごしている姿が見られること、興味や好奇心を持って玩具と関わっていることが挙げられた。「子どもの生活リズムが整う」では、子どもだけで遊んでくれたり、大学の子育てサロンを利用した日は子どもが早く寝てくれたりすることが挙げられていた。

表3

「まなびー」利用のきっかけと理由、特別プログラムの選択理由、利用のメリット、および利用前の印象

「まなびー」利用のきっかけ

- ・ママ友から聞いて。(A, B)
- ・地域の子育て支援施設を利用した際に遊べる場所の一覧をもらったこと。(C)
- ・近所なので、以前から知っていた。よいという評判をきいて。(D)
- ・大学で(開催)というのに興味をもって。(A)
- ・孫を預かって遊ばせに来た。(I)

「まなびー」利用の具体的な理由

- 遊ぶ場所を求めて
  - ・家で遊んでいると退屈するから。(B)
  - ・普段通っている施設以外に、もう1カ所欲しいと思って。(E)
  - ・遊ぶ場所が欲しかった。(G)
- 刺激・楽しさを求めて
  - ・刺激を求めて。(D)
  - ・家だとマンネリ化して飽きてしまったので。(F)
  - ・同じところばかりだったらつまらないから。(I)
  - ・一度来たら楽しかった。(D)
- 近い・気軽
  - ・徒歩で行ける距離なので。(G)
  - ・車で10分ぐらいで来られるので。(E)
  - ・家から近い。(H)
  - ・気軽に来られるのがよい。(A, G)
- 駐車場があること
  - ・予約なしで来られるから。(D)
  - ・駐車場が無料だから。(F, H)
- 全天候型であること
  - ・寒い時とか雨の日とかに行けるところを探していたので。(H)

特別プログラム利用の理由

- ・お絵かきとか、絵具遊びがすごくよかった。家ではさせにくいので。(C)
- ・本学教員のプログラムに行ってみたかった。(D)
- ・初めて行った時にすごかったから。(D)
- ・学生さんがいっぱいいて、素敵だなと思った。(D)
- ・実際にプログラムを実施してくれるのが(年齢の近い)お兄さんお姉さんで、子どもも嬉しいだろうなと思って。(D)

利用のメリット

- ・わざわざ来てる方が多く、意欲的、積極的な人が多いのでより安心に感じる。(E)
- ・来られてる方の接し方とかが、参考になる方も多。(E)
- ・いろんな子がいることを知るのもいいなと思ったから。(I)
- ・おもちゃの取り合いとか(社会経験は)、家だけだとできないから。(I)

利用前の印象

- ・大学ってちょっとハードルがあるかなと思っていた。(E)
- ・最初はちょっと躊躇してた。(公園)デビューのような。(G)

注) カッコ内の記号は調査対象者を示す。

表 4

「まなびー」を利用して「良かった」と感じる点

子どもにとって

○他の子どもとの関わり

- ・よそのお子さんと触れ合う機会があまりないので、他の子と触れ合えるのが良い。(A)
- ・同じくらいの(年齢の)子がいて、声をかけてもらったこと。がつつりは遊ばないが、その場その場で遊べる場所。(H)
- ・他の子どもがいて、わが子の刺激になる場所。(F)
- ・一人で来ても、ここで同じくらいの(年齢の)子がいて声をかけてもらえる場所。(H)
- ・今、遊び場がなくなっている。昔は同じメンバーでずっと遊んでたけど、自分の時代(祖母)と違って、ずっと親がいるわけじゃないので。(I)
- ・他の子と関わる機会が少ない。子どもは人見知りもするし、他の友達と遊ぶ機会もないから、あんまり発育とかの面でも比べたりできない。なので、自分の子はどうなんだろうと(参考になる)。(F)

○親から見た子どものポジティブな反応

- ・(学生との関わりが子どもの)刺激になっている。(B)
- ・いろいろ遊ぶものがあるから、楽しんでくれているかなと感じる。(B)
- ・(玩具に)子どもがぱっと食いつく。あまりにも片付けてみると、ちょっと戸惑うので。(E)

○学生の関わり

- ・プログラムは初めてだったが、学生さんがいて、子どもも楽しめた。(A)
- ・普段は学生さんと触れ合うこともないので新鮮だった。(A)
- ・名前を呼んでもらったり、親ではないお兄さんお姉さんと会うのが良い。(I)
- ・プログラムは結構楽しんだ。子どもはちょっと怖がっていましたが。学生さんがとても丁寧に遊んでくれた。最後に子どもを囲んでもらったのがありがたかった。(H)

保護者にとって

○他の親との関わり

- ・子どもが遊べるのもいいけど、お母さんとおしゃべりできるのが一番息抜きになる。(C)
- ・他のママさんたちと話して、子育ての話とか聞けるといい。(A)
- ・他の親子の方も来られていて、規模的にちょうどいい。他の方と交流もできるのも良い。(E)
- ・昔はちょっと泣いてても自由だったけど、今は人に迷惑かける訳にもいけないので。昔はもうちょっと周りの子にも大らかだったが。(I)

○スタッフとの関わり

- ・どこかに相談するほどじゃないけど、スタッフに気になることを聞けると、安心したりスッキリしたりする。(C)
- ・最近食べないんですけどとか、この月齢でこれっていいんですか、みたいなことを聞ける。(C)

「まなびー」の環境に対して

○まなびーの環境の良さ

- ・玩具が多くて(遊び場が)広い。(E)
- ・夏は涼しい。(G)
- ・雨でも遊べる場所がある。(H)
- ・きれい。(B)
- ・大きい遊び場だと、おもちゃの制限あったり、人数も多く雑然としているが、まなびーはいつでものびのびと遊ばせてもらえる。(H)
- ・玩具に木のぬくもりのあるものが多い。(D)
- ・玩具の種類が多く、いわゆる知育と呼ばれるものが多いのに魅力がある。(E)
- ・(他施設は)キャラクター玩具が多いが、ここはあまりないのがよい。(G)
- ・玩具が沢山あって、他施設と全然被ることがない。(G)
- ・玩具が分かりやすく並べてある。(E)

○まなびーの雰囲気の良い

- ・「いいですよ」という雰囲気で。お友達も誰かしらいる。すごい多いわけじゃないけど。(D)
- ・規模的にちょうどいい。(E)
- ・お友達がほどこにいて、一緒に遊べる日もあり、一人でじっくりと遊べる日もある。(H)
- ・発達成長していけそうな感じがいいなと。(A)
- ・遊びやすいと感じたのが、続けている理由かな。(E)
- ・携帯(をきっかけにした被害)のこと等もあるので、広く浅く付き合いたい。(そうできる)ところが良い。(I)
- ・(他の人と)家も離れてるし、ここはここだけの時間なので気楽。(I)

注) カッコ内の記号は調査対象者を示す。

表 5

「まなびー」利用前後における保護者の変化

保護者同士のコミュニケーション

- ・ 同年代の母親同士で話す機会があまりないので、話せるのが良い。もう少し話したい。(B)
- ・ 「まなびー」はその日だけのお付き合いだけど、以前の特別プログラムで知り合った人とは、たまに会ったりすると「わあ〜」と嬉しくなる。(C)
- ・ ここで出会うお父さんお母さんたちは、とてもコミュニケーションが取りやすい。ここに出てこられる方は、そういう面を求めているのかも。(D)

保護者の気持ちが前向きに変化

- ・ 自分が喋ってスッキリする。(C)
- ・ もっといろんなところに行こうかなと思うようになった。(D)
- ・ いろんなところで出会う人たちと気軽に話したいと思うきっかけになった。(D)
- ・ 外でカフェしたりランチしたりして、リフレッシュする。気分転換になる。(F)
- ・ 行けるところがあるのは、心にゆとりができる。気持ち的にありがたい。(H)
- ・ (子どもは)家では動き回っていますが、ここで楽しそうにしてくれているので(おおらかな目でみられる)。(A)

保護者の生活リズムが整う

- ・ 家よりも時間が過ぎるのが早い。家だとまだ1時間しか経っていないと思うけど、外だったら移動したり準備したりしているうちにいつの間にかお昼になっている。(F)
- ・ 晩御飯も用意しておこうとか、いろんなことをリズムよく生活できる。(C)

注) カッコ内の記号は調査対象者を示す。

表 6

「まなびー」利用前後における子どもの変化

子どもの楽しそうな姿

- ・ ここは子どもがすごい楽しそう。色んな遊具があるので、興味をもって、楽しんでいるところを見れるのがいい。(A)
- ・ 家は家で、動き回ったりしてるんですけど、ここで楽しそうにしてくれているので(おおらかな目でみられる?)。(A)

子どもの生活リズムが整う

- ・ (子育て支援施設は)子どもだけで遊んでくれる(のがいい)。家では集中力がなく、レゴなども2、4分で飽きてしまう。(G)
- ・ (子育て支援施設に行くと)寝るのが早くなる。(G)

注) カッコ内の記号は調査対象者を示す。

表7は、大カテゴリー⑤子育てに対する気持ちの変化についてまとめたものである。中カテゴリーとして「子どもを見る目の変化」と「保護者の気持ちの変化」が抽出された。「子どもを見る目の変化」では、同じ月齢や年齢の他の子どもを見ることで、わが子の成長発達が確認できたという回答や、他の子との比較の視点(言葉がでていない)や、他の保護者の子どもへの接し方に触れることができる、といった回答が得られた。「保護者の気持ちの変化」では、子どもの育ちはゆっくりでいいと思っているが、その気持ちが確認されたという回答や、同じくらいの月齢の子どもをもつ保護者と共通点を確認したり、月齢の大きい子どもを持つ保護者の話を聞いたりすることが子育ての参考になるといった声、さらには普段大人と会話する機会がないので、保育スタッフと会話をするだけでもリフレッシュするといった、やや切実な声もあった。

表8は、大カテゴリー⑥「まなびー」への希望や要望についてまとめたものである。中カテゴリーと

して、「対子ども」、「対保護者」、「『まなびー』の環境に対して」の3つのカテゴリーが抽出された。「対子ども」では、「子ども向けプログラム」と「子どもの預かり」の小カテゴリーが抽出された。「子ども向けプログラム」では、リトミック(既存)や英会話、家では実施しにくい遊びなどの開催を望む声があった。「子どもの預かり」では、授乳中やきょうだいがいてトイレに他の子どもを連れていかなければならない場合に、子どもを見てもらいたいという、預かりの要望が挙がっていた。「保護者向けプログラム」では、保護者同士が繋がれるようなプログラムへの要望が、「『まなびー』の環境に対して」では、時間の延長(現状は午後4時まで)が挙げられていた。



表 7

子育てに対する気持ちの変化

子どもを見る目の変化

- ・同じくらいの年齢の子の成長がどんなものか分かる。(B)
- ・言葉がそんなに出不いんですとかを話せる。(B)
- ・いろいろ遊ぶものがあって、楽しんでくれているかなと思える。(B)
- ・保育園行ってる子に比べたら、言葉が全然少ないと思う。(F)
- ・保育園の子は自分で自分のことできている。そういうのを見ていたら、うちの子は園に入っちゃんとできるかなと（不安に）思う。(F)
- ・家だと遊びの幅が母のみになる。まなび一だと他の方々の声がけとか、玩具で（遊ぶ子どもに）そんな風に接するんだと。（子どもへの接し方の）広がりを感じた。(E)

保護者の気持ちの変化

- ・私はゆっくり育てばいいと思っているタイプですが、よりゆっくりでいいと思える。なるようになるさ。(D)
- ・同性で月齢が近いと、話をしていたら「似てますね」となる。逆に月齢が大きい人とは、この先こうなるのかと先輩の話を（聞ける。）個性がいろいろあると気づける。(D)
- ・他のお母さん達と喋ったりとかはしないタイプで、家でほとんど子どもとしか会話ができてない時がある。でも、職員の方と挨拶するだけでも、かなりリフレッシュする。(F)

注) カッコ内の記号は調査対象者を示す。

表 8

「まなびー」への希望や要望

対子ども

- 子ども向けプログラム
  - ・リトミック（既存プログラム）に申し込みたい。(F, I)
  - ・創作系。(C)
  - ・出店みたいなイベント感のあるもの。(C)
  - ・森をみんなで歩く。(C)
  - ・英会話。(F)
  - ・家ではしにくい遊び。絵の具とか粘土とか。(F)
  - ・夏場の水遊び。(H)

- 子どもの預かり
  - ・別の施設では、授乳中に子どもを見てくれるところもある。(H)
  - ・トイレにも親が付き添う必要がある。(H)
  - ・職員の人が多すぎて遊びにくい時も。(H)
  - ・授乳中に遊んでもらえると助かる。(H)

対保護者

- 親向けプログラム
  - ・（親同士が繋がるプログラムがあれば）参加しても良い。(B)

「まなびー」の環境に対して

- 環境面
  - ・駐車場が近ければ。(C, E, H)
  - ・夏場に日陰がもう少しあれば。(C)
  - ・喫煙所の側と通るのがどうか。(H)
  - ・ベッドとかも用意してくださってるし、小さい時から連れて来られる。(H)
- 開室時間・午後5時くらいまで開けて欲しい。(B, H)
  - ・週3日開いているのはありがたい。(E)
  - ・予約なしなのがありがたい。(E)
  - ・参加しにくいのは午後2時くらい。昼寝の時間なので。(G)

注) カッコ内の記号は、調査対象者を示す。



## 考 察

本研究は、神戸学院大学の地域子育て支援拠点事業である子育てサロン（以下、「大学の子育てサロン」と表記）「まなびー」に対する支援ニーズや利用目的について探索的に検討することを目的とし、その利用者9名を対象に半構造化面接による面接調査を実施した。「まなびー」利用のきっかけや利用前の印象、子育て支援拠点としての特長、子どもと保護者の変化、ならびに子育てに不安や孤独感を感じているかの、4つの観点から考察する。加えて本研究結果を敷衍し、大学が主催する地域子育て支援拠点全般に対して、その役割やニーズについて考察する。

### 大学の地域子育て支援拠点の利用の目的と利用前の印象

「まなびー」を知るきっかけとして、「ママ友に聞いて」「よいという評判を聞いて」など、口コミの要素がみられた。これは、難波他（2022）の全国調査でみられた、大学施設利用群の利用のきっかけが「友人・知人から」であったとする結果と一致する。利用前の印象として、ややハードルが高いことや躊躇があったとの回答もあった（表3）。大学の地域子育て支援施設の印象が「ハードルが高い」とする結果は、難波他（2022）の全国調査でも示されている。大学の施設という、権威的で堅いという一般的なイメージに加えて、大学の子育て支援事業は行政等が主催する一般の事業所と比較して、認知度が低い傾向にある。保護者は、大学施設はなじみが薄くて近寄りづらい、というイメージを持っている可能性がある。また、実際に利用しようとした際にも、広い大学構内の中で子育てサロンの場所が分かりにくかったり、駐車場からの距離が遠かったり、あるいはトイレにオムツ替え台が設置されているか不明であるなど、乳幼児の親子連れにとって、気軽にアクセスできるとはいえない面があることも、大学の子育てサロンのハードルを上げる一因と考えられる。神戸学院大学の子育てサロン「まなびー」では、構内の案内地図を大学の校門で配布したり、「まなびー」のある校舎内のトイレにオムツ交換台を設置したり、廊下の壁に子どもに親しみのあるキャラクターを装飾して楽しい雰囲気を醸し出すなど、できる限りの工夫を行っている。

本研究の結果で示されたように、ママ友からの紹介など、口コミで良いと分かることで心理的なハードルが下がり、大学の子育てサロンの利用に到ったことが推測される。今回の調査対象9名のうち3名は20回以上の頻回利用者であった。きょうだいで利用も確認されており、やや高いハードルを乗り越えて利用に到った場合、大学の子育てサロンの気に入る、長期的かつ頻回の利用につながる可能性が示

唆された。

大学の子育てサロン利用の具体的な理由として、「遊ぶ場を求めて」、「刺激・楽しさを求めて」、「近い・気軽」、「駐車場があること」、「全天候型であること」が示された（表2）。未就園児を抱える保護者は、子どもが家のみでの生活では飽きてしまうため、自宅以外に近場で遊べる場所を求めていること、利用の際には無料の駐車場などのアクセスの良さや天候に左右されない施設であることなどが、利用の決め手になると考えられる。堀口（2011）は、都市化や地域ネットワークの弱体化、少子化などにより、母親がひとり孤立して子どもと一日中向き合わざるを得なくなっていると指摘する。こうした現代の子育て事情を踏まえると、大学の子育てサロンは、気軽に安心して子連れで出かけられる場としての役割を担っていると考えられる。

神戸学院大学の子育てサロン「まなびー」では、心理学部の学部3年次生による特別プログラムが提供されている。ここでは、演習授業の一貫として学生がオリジナルの子ども向けプログラムを考案し、利用者に提供している（道城他、2016）。本研究の結果からは、学生との触れあいがあることや、本学の教員によるプログラムなど、大学以外の施設では得られにくい体験を求めて利用していることがうかがえた。難波他（2022）でも、大学の子育て支援拠点の利用理由として、学生が関与するプログラムの提供を含めた、地域とのつながりが高いことが満足度に繋がっていることが示唆された。これらは、今回の研究結果と概ね一致する。

### 大学の地域子育て支援拠点としての特長

神戸学院大学の子育てサロン「まなびー」における、大学の子育て支援拠点としての特長を、子ども、保護者、環境の3つの視点から考察する。今回の調査では、子どもにとって良かったとする回答が最も多かった。特に「他の子どもとの関わり」に関する回答が多く、保護者にとって大学の子育てサロンを利用することのメリットの中で大きな部分を占めていることが示された（表4）。現代の子育て環境の課題として「子どもの多様な大人・子どもとの関わり」の減少（こども家庭庁、2024b）が指摘されているが、大学の子育てサロンでは、同年代の子どもを連れた親子との自然な出会いのなかから他児との交流や遊びが展開され、子どもの成長発達のために有効な刺激が得られていると考えられる。

保護者にとって良かった点として、「他の親との関わり」、「スタッフとの関わり」が挙げられた（表4）。「（他の）お母さんとお喋りできるのが一番息抜きになる」の回答に代表されるように、保育スタッフと子どもの成長発達について話すことにより、保護者自身が「安心したりスッキリしたりする」と考えられる。神戸学院大学の子育てサロン「まなびー」を

実施している神戸市西区は、子どもをもつ世帯が多い地域であり<sup>1)</sup>、本事業を利用する保護者は、産休や育休中の親が一定の割合を占めている。『日本子ども資料年鑑 2023 (愛育研究所, 2023)』によると、子育て中に孤立や孤独を感じるときとしてもっとも高いのは「子どもと二人きりでいるとき (61.2%)」であるとする調査結果がある。乳幼児を抱える利用者にとって、日中に子どもと二人きりであったり、核家族で祖父母の援助を受けにくかったりする場合、大人と会話する時間が極端に少なくなる。こうした状況において孤独感を感じ、話せる大人を求めて大学の子育てサロンを訪れていると推察される。浅井 (2019) によると、地域子育て支援拠点の利用者満足度の第一因子に、「利用しやすさ」が挙げられている。ここでいう「利用しやすさ」因子には、「挨拶と笑顔で親子を温かく迎え入れてくれる」、「子育ての悩みなど、気兼ねなく相談できる」、「子どもの個性や可能性が認められ、尊重されている」などの項目が含まれている。つまり、「利用しやすさ」は、施設の近さや駐車場の有無といった物理的な利用しやすさに加えて、より広い意味でソーシャルサポートや見守りの要素が含まれている。大学の子育てサロンの良さとして、ソーシャルサポートの側面を加味する必要がある。

大学の子育てサロンの良さとして、環境の良さと雰囲気の良いことが明らかになった (表 4)。プレイルームに用意された玩具への満足感は、玩具の量においても質においても肯定的な回答が多かった。「玩具が多く」て「きれい」なだけでなく、「分かりやすく並べてある」ことや、「玩具に木のぬくもりのあるものが多い」こと、さらに「知育と呼ばれるものが多いのが魅力」など、子育てサロンに用意された玩具が、子どもの成長発達を促進すると受け止められていることが示唆された。雰囲気の良さについては、保育スタッフが利用者を大らかに迎え、保護者が他の利用者と交流するのを適度な距離感で見守っていることが評価されていると考えられる。堀口 (2011) は、親たちが「公園デビュー」に強い不安や緊張を抱えていることを取り上げ、親は孤独感から子育て仲間を求める一方で、その人間関係に強いストレスを感じていると指摘する。子育てサロン「まなびー」のスタッフによる見守りは、大学の子育てサロンをはじめて利用する保護者の緊張を和らげ、安心感のもとに保護者同士のゆるやかな人間関係の形成を促進していると考えられる。

#### 大学の子育てサロン利用による子どもと保護者の変化

子育てサロン「まなびー」の利用によって、子どもも保護者も「生活リズムが整う」ことが示された (表 5, 表 6)。子どもが大学の子育てサロンで好奇心を満たしつつ十分に満足して遊び、早く寝かせることができるならば、保護者の生活リズムも整い、心

身の健康が増進されることが考えられる。

保護者の気持ちの変化として、「保護者同士のコミュニケーション」が促進され「保護者の気持ちが前向きに変化」することや、同じくらいの月齢の子どもをもつ保護者と触れあうことで、わが子の発育の状況を客観的に捉えたり、他の親の子どもへの接し方を見て自身の子どもに対する対応の幅が広がったりすることが明らかとなった (表 7)。大学の子育てサロンへの参加は、大豆生田 (2007) が示唆するように親子が安心して過ごせる遊び場であるだけでなく、同年齢の他の親子と触れあうことによる、親子の成長の機会でもあると言える。

#### 子育てに不安や孤独感を感じているか

本研究において、直接的に孤独感に言及した回答はみられなかった。一方、「同年代の母親同士で話す機会があまり」ないと感じていたり、子育てサロンで他の保護者と会話することが「息抜き」になったり、「自分が喋ってスッキリする」といった回答がみられた (表 5)。こうした回答から、少なからず育児ストレスを抱える保護者にとって、大学の子育てサロンは、「リフレッシュできる」場所であったり、「心にゆとり」を取り戻せたりする場として機能していると考えられる。

一方、大学の子育てサロンは、やや「ハードルが高い」という印象を乗り越えて、「わざわざ来ている人が多い」という回答からは、生活に比較的ゆとりがあり、子育てに対して意識が高い保護者が参加していると推測される。実際、今回の調査対象者 9 名のうち 6 名は育休中を含めて就労している。若本 (2016) は、子育て支援の利用動機は、子育てに関する不安からよりも、開かれた場での子育てや自分自身のリフレッシュを求めていると指摘している。実際、研究者らが保護者と面接調査した際に、保護者らは子育ての負担もストレスも感じているが、生活困窮や虐待への切迫感ではなく、普段の生活にプラスアルファとなる子育て支援の資源や、子どもにとっての良質な刺激、あるいはより質の高い子育て支援を求めていると感じられた。大学の子育てサロンが提供する教育的なプログラムも、子育てに関心の高い保護者のニーズに合致していると考えられる。表 8 に示された希望や要望は具体的で利用者に有用な要望が多い。大学の子育てサロンが今後地域の子育て支援資源として浸透するために、こうした保護者の声を真摯に受け止め、利用者のニーズに合ったものとなるよう工夫することが求められる。

#### 本研究の限界と今後の課題

本調査の限界は、調査対象者の人数が 9 名とやや少なかったため、「まなびー」利用者の全体像を捉えているとは言い難いことが挙げられる。加えて、子育てサロンを開催している同室内で、子ども同席で

の調査であったことから、調査対象者が不安や孤独感などを抱えていたとしても、内心を吐露しにくかった可能性がある。面接調査の実施方法の改善を検討し、保護者にも子どもにもストレスなく語ってもらえる調査環境を整えることが望まれる。

今後、当該大学の子育てサロン利用者の全体的な傾向を把握する質問紙調査を実施することによって、定量的に利用者の実態やニーズを把握するとともに、大学における地域子育て支援拠点事業が提供する子育て支援のあり方のさらなる検討が求められる。

## 付 記

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。本研究は、2022～2024年度神戸学院大学心理学部社会貢献・地域連携プロジェクト助成金、及び神戸市地域子育て支援拠点助成金の助成を受けて実施された。

## 引用文献

- 愛育研究所(編)(2023). 日本子ども資料年鑑 2023 KTC 中央出版
- 浅井 拓久也(2019). 地域子育て支援拠点の子育て支援に対する利用者満足度に影響を及ぼす要因 秋草学園短期大学紀要 (35), 1-13.
- 道城 裕貴・清水 寛之・小石 寛文・前田 志壽代・山上 榮子(2015). 神戸市「地域子育て支援拠点づくり」事業にもとづく神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」の基盤整備 教育開発センタージャーナル, 6, 77-89.
- 道城 裕貴・清水 寛之・山上 榮子・前田 志壽代(2016). 神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」の現状と課題 教育開発センタージャーナル, 7, 45-51.
- 堀口 美智子(2017). 第2章子育てをめぐる問題 松本園子・永田 陽子・福川 須美・堀口 美智子(著)実践家庭支援論第3版(pp.25-49) ななみ書房
- 柏女 霊峰(2020). 地域子育て支援の過去・現在・未来 都市とガバナンス/日本都市センター 編 (34), 62-70.
- 川喜田 二郎(1980). 発想法——創造性開発のために—— 中央公論社
- こども家庭庁(2024a). 令和5年度地域子育て支援拠点事業実施状況 Retrieved August 16, 2024 from <https://www.cfa.go.jp/policies/kosodateshien/shien-kyoten>
- こども家庭庁(2024b). 地域子育て支援拠点事業とは(概要) Retrieved August 16, 2024 from <https://www.cfa.go.jp/policies/kosodateshien/shien-kyoten>
- 国立社会保障・人口問題研究所(2024). 日本の社将来推計人口(令和6年推計) Retrieved August 16, 2024 from <https://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2024.asp?chap=0>
- 厚生・文部・労働・建設大臣合意(1994). 今後の子育て支援のための施策の基本的方向について(エンゼルプラン) Retrieved August 16, 2024 from <https://www.mhlw.go.jp/www1/topics/h10-kyoku/jidou/tp0120-6.html>
- 厚生労働省(2021). 令和3年版厚生労働白書——新型コロナウイルス感染症と社会保障—— Retrieved August 16, 2024 from <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/20/index.html>
- 厚生労働省(2023). 令和5年(2023)人口動態統計月報年計(概数)の概況 Retrieved August 16, 2024 from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai23/index.html>
- 厚生省(1993). 令和5年版厚生労働白書——つながり・支え合いのある地域共生社会—— Retrieved August 16, 2024 from <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/22/index.html>
- 神戸市(2024). 神戸市人口統計 Retrieved October 29, 2024 from <https://www.city.kobe.lg.jp/a47946/shise/toke/toukei/jinkou/index.html>
- 日下 慈・クサカ チカ・笠原 正洋(2016). 地域子育て支援施策の変遷——支援者の専門性を中心に—— 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 48, 7-22.
- 丸谷 充子(2016). 子育て支援者がとらえる親子の成長:——子ども広場の子育て支援者へのアンケート調査から—— 浦和論叢, 54, 89-105.
- 中谷 奈津子(2014). 地域子育て支援拠点事業利用による母親の変化 保育学研究, 52 (3), 319-331.
- 難波 愛・道城 裕貴・清水 寛之・村井 佳比子・岡野 太郎・中村 敏(2022). 地域子育て支援拠点事業の利用状況に関する全国 Web 調査報告——大学施設利用を中心に—— 神戸学院大学心理学研究, 5 (1), 53-61.
- 大豆生田 啓友(2006). 支え合い, 育ち合いの子育て支援:——保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論—— 関東学院大学出版会
- 若本 純子(2016). 誰がどのように子育て支援を利用してきたのか——わが国の子育て支援における課題—— 佐賀大学教育学部研究論文集/佐賀大学



教育学部, 1 (1), 1-9.

### 脚 注

- 1 2024 年 1 月現在の神戸市の人口は 1,498,133 人であり, そのうち 0 歳～6 歳の人口は 68,792 人である (神戸市, 2024)。神戸学院大学が位置する神戸市西区には, 神戸市内の 0～6 歳児の 14.2% (9,760 人) が居住し, 市内 9 区のなかで当該人口の多さは第 3 位である。

—2024.8.30 受稿 2024.11.14 受理—